

## 非行防止教室で教わったこと

園津市立府中小学校 五年 谷口 理奈

私は、非行防止教室で教えてもらひたたじめについて考えました。

いじめは、ダメなことです。いじめている人もいじめを知らんばかりしている人も、見て見ぬふりをしている人もいじめをしている人と同じになると聞いて、「それはそつだ。どうして助けてあげないの」と思いました。知らんばかりしてくる人は、その行動がいじめていることになるという感覚がないのだと思います。相手がその行動でも悲しい気持ちになっていることを知つてほしいです。一人ぼっちがつらいことを知つてほしいです。悲しいとき、だれも助けてくれる人がいなのは、本当につらいです。非行防止教室の話では、生きているのがつらいくらいになる人もいると教えてもらひました。

私は、転校をしたことがあります。友だちができるまでは、どきどきするし、一人ぼっちでつらいです。声をかけてくれる友だちがいたら、どんなにうれしい気持ちになるか。みんなに知つてもうつりたいです。やばにしてくれるだけで、どんなに心強いか教えてあげたいです。

「ここに転校してきたとき、できるだけ人にもじわくをかけないようになるとしゃべりもに静かに過ごしていました。でも、それでは一人ぼっちのようでした。さみしい気持ちになっていたけど、そんな私のそばに友だちがしてくれました。特に何をしゃべるわけではないけど、一緒にしてくれるだけほつとしました。そうあるうちに遊びようになつて、そして、毎日毎日一緒に遊びました。テストの点数が悪かったときには、

「次があるじゃん。」  
と言つてほげましてくれました。友だちがしてくれることほとても

心強いです。

人をいじめてしまつ人も、きっと本当にやがて気持ちがあるんじゃないかと思いました。きっと何か理由があるんだらうと思っています。自分から声をかけたり、何かを伝えたりしてついたら、いじめてしまつ人にも何か変化が起つるかもしれないなと思いました。

私は、絶対にいじめなんかしたくないし、されたくもないです。そして、いじめている人もいじめられてしている人も見たくないです。いつまでも友だちとなかよくしたじし、たくさん遊びたいです。心がすれちがって、なかよくできなこととかあつても、声をかけて自分からおしゃべりしたいです。本当は、自分から声をかけるのは勇気がいるし、できそくなこと思つてしまつけど、校長先生が、「ちよつとの勇気を出つてみよ。チャレンジしてみよ。」

とねつしゃつしてしまつた。自分ができなじうとにチャレンジあることはつらいことだと思つので、私はこのことにチャレンジしてみたいと思いました。今は、自分から声をかけるようにしてします。私のチャレンジで、楽しい学校を創ることができたうれしいです。みんなが楽しく勉強できる学校にしてみたいです。みんながやさしくて、笑顔がいっぱいの学校にしたいです。

非行防止教室の学習で、自分の新しいチャレンジを見付けた気がします。

### 審査員からのメッセージ

非行防止教室で学んだこと、考えたことがわかりやすく表現されています。経験を通して気づいた友だちへの感謝と、やさしく笑顔いっぱいの学校にしていきたい前向きな気持ちが伝わります。



## 犯罪をなくすために

京丹後市立網野中学校 二年 井上 早優

最近の日本は殺人事件や強盗事件、放火事件の他にもひじめや殺人など、日本各地が犯罪のニュースであふれています。

私は、父の影響でよくニュースを見たり、新聞を読んだりします。朝はテレビでニュースと天気予報を見て学校にいく、これが私の家の朝のルーティーンです。ゾッとあるような怖い事件もあれば、ほっこりするおめでたい報告もあります。そして、犯罪のニュースが流れてきた時に私はいつも、どうして人は犯罪を犯してしまったのだろうと思います。

どうして同じ人間なのに、その同じ人間を殺してしまったのだろうと思います。どうして暴力をふるつたのだろうと思います。そして同時に、事件を起こしてしまった人の家族や友人はどんなことを思っているんだろうと思います。人が犯罪を犯してしまった理由は、寂しさや孤独感があるからだと私は考えます。なぜなら孤独感は他者との十分なつながりが足りず、寂しさ、虚しさ、疎外感、不安感など様々な感情を伴うからです。

では、孤独感を抱いている人を減らすにはどうすればよいのでしょうか。他者とのつながりが十分にあり、寂しい思いを感じさせない環境をつくればいいのです。しかしそれは、そんなに簡単なことではありません。だから家族との関係がすごく大切だと、私は思うのです。当たり前のように一緒に過ごしているけど、家族は信頼し合えて、理解してくれて、一番の味方になってくれる存在だからです。

**審査員からのメッセージ**  
自分自身の問いをもとに、経験を振り返りながら、わかりやすく考えを表現されています。人と人とのつながりの大切さと家族への深い感謝が文章全体から伝わり、明るい社会への想いと希望にあふれています。

た頃からは、「学校から帰ると家には私一人」が当たり前でした。他の友だちは家に帰つても兄弟がいたり、お父さんやお母さんがいたりして、とてもうらやましかったのを覚えています。でも、ある日突然兄が学校に行けなくなりました。父と母は、何とか学校に行かせようと毎日毎日ベッドから兄を引きずり起こしていました。それでも兄は学校に行けませんでした。だから、私が学校から家に帰ると兄がいる。私は小さい頃から兄が大好きだったの、すごく嬉しかったです。両親はすぐく悩んだ数年だったと思うけれど、私はすぐ楽しかった数年でした。そこで私は、家族が一人居るか居ないかでこんなに違うのかと、家族の存在の大きさに気づかされました。兄が学校に行けなくなる前は、寂しくてたまらなかつたけど、兄が学校に行けなくなつた後は、寂しいと感じたことは一度もありませんでした。今は、太学に進学して元気に過ごしている兄ですが、そんな兄のおかげで、「家族はかけがえのない存在だ」とじつことに改めて気づくことができました。兄には本当に感謝しています。

非行に走つてしまつた人の周りにも、もし話を聞いてあげられる誰かがいたら、事件は起きなかつたのではと思います。味方になつてくれる家族や友人がいて、生活していく場所があると孤独を感じる人が減り、犯罪や非行が少なくなり、明るい社会が創られていくと思うのです。